特集

見せる

——絵空事と遊び心

つくり物の世界と本物の世界の区別がつかないほど、技術が発達してきた現代の娯楽産業。しかし、空とぶ絨毯をつるす糸が見えてしまっていたころの映画にいまだに魅せられるのは、単に懐旧の念だけで説明できることではないかもしれない。現実とのずれを見せる芸、虚構であることを知りつつ楽しむ余裕。そんな騙し・騙されのゲームは、遊び心を共有することによって成立する。絵空事との付き合い方について考える。

京都の六斎念仏で演じられる獅子。重ねた碁盤の上にのっている

まつりに興を添える見世物小屋。山形にて

目眩まされ、騙られる快感

笹原 亮二（ささはら りょうじ） 民族文化研究部

子どものころ、興味津々だったものがある。ひとつは怪獣映画。長い休みの前に学校で配られる割引券を毎回きちんと消費するのがわが家の常だった。もうひとつは見世物小屋。近所の薬師堂の縁日には必ず見世物小屋が出た。毎年親に連れられて出かけたが、実際になかに入ったのは、少し大きくなって一人で行くようになってからだった。このふたつ、ぼくのなかでは実はつながっていた。

怪獣映画といっても今のようにCGなんて使わない。流行のギャグを真似たり膝で四足歩行をしたり、いかにもなかに人が入っているのがわかる代物だった。見世物にしても映画会社が作った現代のお化け屋敷にはほど遠い。キッチュな看板を掲げた薄暗い小屋のなかで、人がごそごそ動いているといった具合だった。

ぼくは当然ながら、いずれもまったくの本物とは思っていなかった。かといって、子どもだましの嘘と醒めていたわけではない。毎回出かけていっては映画館や小屋のなかでめくるめく時を過ごし、見た後は充実感に満たされていた。確かにぼくは、そこで演じられる怪獣や異形の人びとが登場する虚構の世界に夢中になり、それとの遭遇を楽しんでいた。

こうしたぼくの嗜好は、せっせと獅子舞見物に出かけている今もあまり変わっていない気がする。各地では実にさまざまな獅子を目にした。猫のようにじゃれる獅子、振袖姿で男に恋い焦がれる獅子、碁盤上で逆立ちする獅子。さまざまに趣向を凝らした獅子に出逢うとつい見入ってしまう。どれも人が演じていることは百も承知だが、演者たちは思いも寄らない身体の用い方でこの世ならざる聖獣を出現させる。それがぼくの目と心を奪ってしまう。

改めて考えてみると、こうした事態は見物という行為には大なり小なり付き物なのに気づく。芸能しかり、見世物しかり、祭りのパレードしかり。さらにそれは、視覚に限らず聴覚、即ち話芸や物売りなどの言葉の世界にも及んでいる。ぼくらはそこで見せられ、騙られたことを、どこかで絵空事と了解しつつ魅せられてしまう。なぜそれを享受するのか。そこでは、平素馴染みの身体や物品や言葉をあえて用い方を変えることで、日常とは異なる世界が出現する。その変化の鮮やかさにぼくらの普段の意識や感覚のありようが揺るがされ、世知辛い現実から一瞬自由になる浮遊感や開放感を感じるからかも知れない。目眩まされ、騙られる快感とでもいおうか。

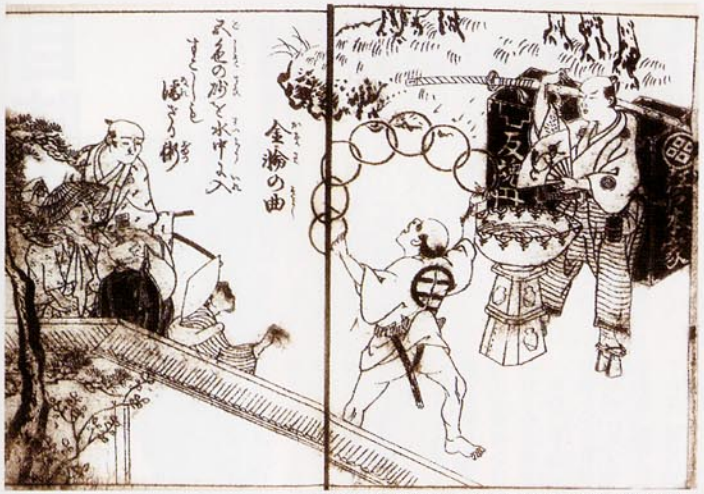
しかし、絵空事だからといって侮るなかれ。この種の快感に人は陶酔し、時として規則や秩序に統御された現実世界の否定へと駆り立てられる。古今東西を問わず、時の権力が芸能に神経をとがらせ、ことあるごとに抑圧してきたのは、見物のこうした性向とたぶん無関係ではない。

肝心なのは、あくまで絵空事は絵空事として遊び楽しむこと。それは昨今話題の仮想現実にも通じるような気がする。

歌舞伎で有名な「お夏清十郎」を演じる獅子段物

不思議の幻術——「放下」に惚ける

上島 敏昭（かみじま としあき）
大衆芸能研究家



『七十一番職人歌合』（『新日本古典文学大系』61　岩波書店刊）より、「はうか」

『放下筌』平瀬輔世著（宝暦14年〈1764〉刊）国立国会図書館蔵

考えてみれば、手品というのはヘンな芸能だ。手品師は騙しのプロで、客はそれを承知で騙されて大喜びする。また、そこには必ず種があるのに、手品師はけっしてネタバラシなどしない。なんとも客をコケにした芸能だ。そんな手品のどこに、私たちは魅力を感じるのだろう。

もっとも、ネタバラシは厳禁というのは、あくまでも建前、実際には、昔からたくさんの手品の種本が発行されてきた。その代表的な一冊に『放下筌』がある。放下とは、手品の、当時の呼称である。しかし、中世以来の芸能ジャンルとしての放下は、もっと広義で、毬や棒、刀などを投げる、現在のジャグリングを中心に、手品ばかりか歌までも含むものだった。いくつもの玉を投げ分けたり、トリックで目を眩ませたり、節おもしろく歌ったりして、人間業とは思えない不思議を現出する芸能、それが放下だった。

富山県の民謡「こきりこ」の源流も放下で、『七十一番職人歌合』に描かれた「はうか」は、こきりこを打ち鳴らしている。腰にさした柄杓は布施や投げ銭を受け取るため、また、七夕飾りのような笹を背負っているのも特徴である。能の「隅田川」や「三井寺」では、狂女が笹を持って登場する。これを狂い笹といい、狂気のシンボルとされる。

狂は芸能と縁が深い。細川涼一は『逸脱の日本中世』で「芸能者そのものが狂者と見られ」、「村を離れて流浪し、場所柄をわきまえず道にあくがれ出て歌舞するものを『狂』と見るのが、中世日本の狂気観であった」と書く。つまり、広義のマジシャン＝放下師は、生活不適格者として社会から締め出された存在であった。

そしてひとたび彼らが社会の内に入ると、危険な存在として恐れられ、排除された。たとえば、泡坂妻夫『大江戸奇術考』では、キリシタンの残党として磔刑にされた市橋庄助と島田清庵、それに奇怪な幻術を用いたとして死刑に処せられた生田中務らの名前を挙げている。また、井原西鶴の最後の作品『西鶴織留』に「我が朝の果心居士　これらが技術の法は乱のもとひ」と記された伝説のマジシャン・果心居士には、信長や秀吉と対決したとの伝承があり、いくつもの小説に題材を提供してきた。

なぜ彼らが、世の中を乱すと断定され、権力者の怒りにふれたのか。それはいうまでもなく、権力者のからくりが手品の手口そのものだからだ。つまりこの社会は、権力者が主宰するマジックショーであり、そこでは権力者こそが手品師。ネタバラシなどされたら、その途端に現実はひっくり返ってしまう。これでは手品師は権力者の目を逃れ、社会を離れて流浪するしかあるまい。

私たちが手品に楽しさを覚えるのは、社会から落ちこぼれた手品師に身をまかせることで、私たちを呪縛する社会の常識から精神を解き放ち、権力や現実原則から自由になった桃源郷に、しばしのあいだ遊ぶことができるからなのだ。

特集

見せる——絵空事と遊び心

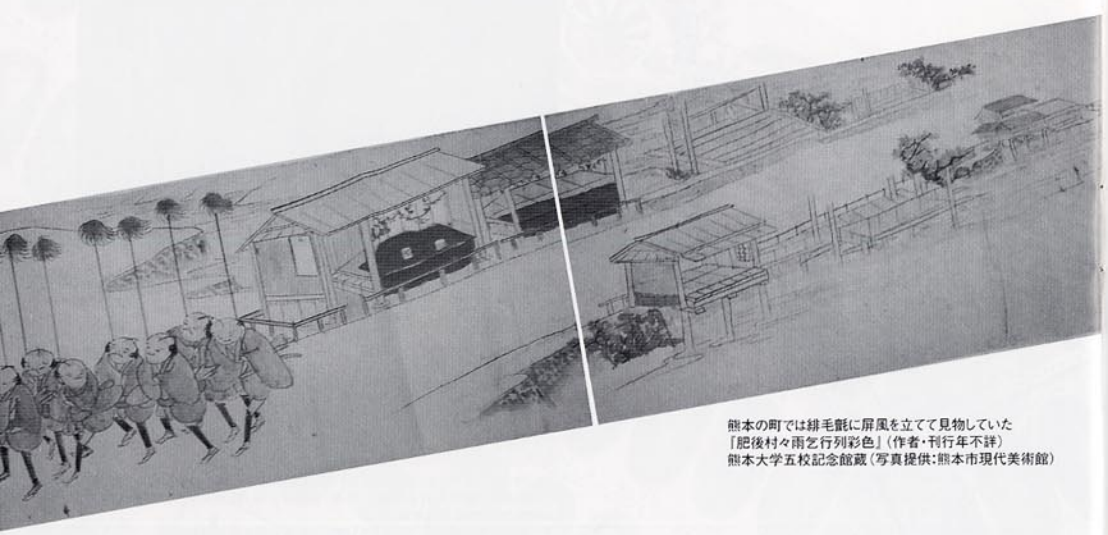
祭礼つくり物——熊本城下の雨乞い——

福原 敏男（ふくはら としお）
日本女子大学教授

都市祭礼の楽しみのひとつは、そぞろ歩きしながら、町々が出した趣向を凝らしたつくり物を見較べることにあろう。街の鎮守に奉納され、見物者の目を喜ばせるために美しく飾り立てられたつくり物。都市では複数集団が対抗するため、つくり物の趣向競争はエスカレートし、その華やかさは村まつりとは全く別種のものとなる。見物者をあっといわせるつくり物を毎年つくり替えては展示し、または行列し、終わったら流し、焼きすてるところもある。その根底には、「風流」（ふりゅう）という一回性、流行性、意外性の美意識が流れている。

一見危機に瀕する儀礼と考えられる真剣な雨乞いにおいてさえ、祭礼つくり物の世界が横溢する事例は数多い。たとえば、江戸時代の熊本城下では雨乞いの練物（つくり物、仮装、囃子の行列）が毎年のようにおこなわれた。旱魃の恐れがあると各地から雨乞いに因んだつくり物を出し、春日の横手村（現熊本市横手）を先頭に行列をつらねて熊本城下を練り歩いた。同村では雨乞い祈願の際、縄を巻き付けた梵鐘をいったん池に沈めて引揚げるところから、雨乞い行事自体を「鐘巻」とよぶ。肥後の地誌『肥後国誌』によると、旱魃の年、横手村手永と田崎村では女面の蛇身が鐘にまといついたつくり物を出して囃した。権道村からは夥しい仮装の山伏を出して横手の鐘ヶ淵まで練り、田崎村の農夫が蛇の止めを刺す所作をし、鐘とともに淵に沈めると験があり雨が降った、とも伝えられる。天保年間の『名所・名物東肥名寄』によると、この雨乞いに各地より出される比丘尼、坊主、唐辛子、山伏、大名行列などのつくり物が有名であり、一七八〇年までに五八回も「鐘巻」が出たという。この行事を描いた『肥後村々雨乞行列彩色画』全一七巻（熊本大学五校記念館蔵）や『鐘巻雨乞全略図』（国立歴史民俗博物館蔵）は実に興味深い。後者は一八一四年夏の「雨乞行列之図」を一八七三年七月に久琚堂が再板行したものであるが、その代表的な出し物（括弧内）を記す。

横手村の猩々は中国伝来の酒好きの霊獣で能や歌舞伎舞踊を媒介にして、祭礼風流に好んで採り入れられた。御寺領村（験者が数珠をもって鐘を念じる）、田崎村と椎田村（雷神）、久末村と阿弥陀寺村（竜王）、荒尾村（竜神）、今村（竜神珠取り）、十三村（宝珠と団扇）、二本木村（鐘巻）は、竜にまつわる雨乞いイメージのつくり物である。権藤村（屋台の天狗人形と大法螺貝）と苅草村（天狗面）は山伏と験力に関するつくり物、戸坂村（忠臣蔵狐師の勘平）、田崎村（小野道風）、嶋村（大大根と頼光の鬼退治）、土川原村（相合傘）、池端村（蟹）、



熊本の町では緋毛氈に屏風を立てて見物していた
『肥後村々雨乞行列彩色』（作者・刊行年不詳）
熊本大学五校記念館蔵（写真提供：熊本市現代美術館）

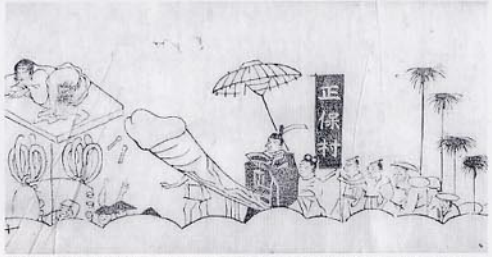
寛容な客——ニセ者の芸能史にむけて

真鍋 昌賢（まなべ まさよし）
大阪大学助手

上白石村（蓑亀）は芝居、文芸、瑞兆のつくり物であろう。最後の正保村（大名行列）も近世の都市祭礼にはお馴染みの風流である。現実の大名行列の直の写し、または歌舞伎の奴振りなどのフィルターを通して祭礼行列になったものなどさまざまなケースがある。

なかでも、とりわけ異様なのは濱口村（神主と巫女の乱交）である。同じ濱口村の出し物（精力が雨を呼ぶ趣向）でも『肥後村々雨乞行列彩色画』と『鐘巻雨乞全略図』は、出た年によって違いがあるのか、絵師によって表現が異なるのか、図のように異なる。毎年恒例の祭礼におけるつくり物ならば滞による風俗の検閲もできようが、臨時の祝祭では規制が行き届かなかったのであろう。祝祭につきものの「日常の逆転」（聖職者の堕落）が現状（旱魃）打破を呼び込むという連想を喚起するものであろうか、まるで目眩ましにあったようである。

清姫が鐘に取り付いているつくり物『肥後村々雨乞行列彩色画』（作者・刊行年不詳）熊本大学五校記念館蔵（写真提供：熊本市現代美術館）



濱口村の出し物（神主と巫女の乱交）は日常の逆転（聖なるものの堕落）を演出
上『肥後村々雨乞行列彩色画』（作者・刊行年不詳）熊本大学五校記念館蔵（写真提供：熊本市現代美術館）
下『鐘巻雨乞全略図』（明治6年（1873）刊）国立歴史民俗博物館蔵

寄席に客をいかに引き込むのか。いや、もっと正確に言うならば、通りすがりの者をいかに客に変えるのか。ビラ、ポスター、看板、幟、さらには新聞広告などによる呼びかけは、小屋の外で繰り広げられるかけひきのための「パフォーマンス」だ。ときにその呼びかけは、興行の内実からかけはなれた宣伝となる場合もあるだろう。たとえば、顔を知られていないのをいいことに、有名演者と酷似した名前を掲示して客を誘い込むというやり口がある。

作家・正岡容は、浪曲のインチキ興行に出くわしたことを短いエッセイに書いている。昭和一〇年、沼袋付近の新開地にある「汚い寄席」での出来事である。出演者は「九州が生んだ名人米若」や「関西の大御所木村重友」であった。ただし出身地は小さな「割り注」としてこっそり挿入されていた。本物の米若は新潟県出身であり、重友は神奈川県出身である。つまりこの興行は、当時の有名演者である寿々木米若や木村重友の名を騙るニセ者の仕業だった。三分の一の客はニセ者と知った上で入場しており、あとの三分の二はレコードやトーキーでおなじみの重友や米若が聴ける、見られると信じていたのだという。さてニセ者の口演はというと、なんと本物そっくりであった。特にニセ重友の節回しは、本物の全盛期を彷彿とさせるものだったという。正岡は本物であると信じ切っている客たちが多いと記しているのだが、むしろ注目したいのは、ニセ者であると気づいている客が少なからずいたことである。気づいている客がいるのならば、野次がとんで場が混乱してもよさそうなものだ。しかしニセ者の実力は、インチキ臭さに気づいていた客の寛容さをひきだすのに充分であった。ニセ者とおとなしく聴き入る客とのあいだには、いわば「共犯関係」が成立していたのである。

有名浪曲師のニセ者が、かつては田舎を中心に「活躍」していた。こっそり営業する彼らの人数を、はっきりとつかむことはできないのだが、どうやら一人や二人ではなかったようである。浪曲界の番付のなかには、本名や写真を入れて、騙されないようにとの注意書きをわざわざ記したものもあった。また昭和一〇年代のファン雑誌のひとつを開くと、ニセ者の芸名がならべられて注意が呼びかけられている。鼈甲斎虎丸ならぬ亀甲斎虎丸、東家楽燕ならぬ東家薬燕、春野百合子ならぬ春日野百合子などなど。酷似する名前のバリエーションが多いのは、吉田奈良丸である。奈良丸・関東奈良丸、奈良一丸などが営業していたという。有名浪曲師の名前を騙る者はあとを絶たなかった。

正岡の経験は、メディアの受容史的な関心から読み解かれるべき出来事である。ニセ浪曲師の「悪徳商法」は、レコードの普及がなければ成立しえなかった。レコードは声を複製することにより、全国的な有名演者をつくりだし、さらには繰り返し聴いて物まねをする聴衆をつくりだした。つまりレコード・ラジオが十分に普及し、なおかつテレビが普及していないという条件のもとで、浪曲師のニセ者はこっそりと、しかし闊達に活躍できたのだ。ウソとマコトの境界線上に身をゆだねるニセ者たちは、世の中が共有するメディア環境、さらには複製をめぐる思想のあり方にその命運を握られている。言説に残りにくいニセ者の実践史も、確かに日本芸能史の一部であるといえるだろう。

昭和13年〈1940〉版「大日本浪曲技藝師之鏡」。年号の上に「偽物防止写真一覧」とあり、その左にインチキ興行への注意が記されている

特集 見せる
——絵空事と遊び心

『隨筆 寄席風俗』正岡容著（昭和18年〈1943〉年刊 三杏書院）